

Title	『三国志演義』の左慈像について
Sub Title	The image of ZouCi in "Sangouzhi"
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.44- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『三国志演義』の左慈像について

吉永 壮介

一

後漢王朝は長年の腐敗に耐えかねたかのように、党錮の禁から黄巾の乱へと、急速に瓦解していった。乱世の幕開けを迎えるにあたって、魏の太祖武帝・曹操が淫祠邪教を禁じたことは有名である。そして後には逆に方術の士を幕下に集め、民間への流出を防ごうと図ったのは、宰相としての一つの卓見であった。そうして曹操の幕下に集められた方術の士の中に、華佗や甘始らとともに左慈の名も見える。

左慈は『三国志』には伝を立てられておらず、『後漢書』に至ってようやく方術伝に収められているが、そこに見える左慈の事績は、『搜神記』の記述を踏襲したものである。また、左慈は『神仙伝』にも伝を立てられており、『搜神記』『後漢書』とは異なる逸話も載せている。

後の『三国志演義』では、左慈は曹操を手玉に取る妖術使いとして現れることになる。本稿では『演義』の左慈像

が、『搜神記』『後漢書』系統と『神仙伝』系統の逸話の狭間で、いかにして形成されたかについて考察してみたい。⁽¹⁾

二

左慈、字は元放、廬江の人である。まず、左慈と時代を共にした人々、及び左慈の伝説の草創期を生きた人々の左慈観がどのようなものであったのかを辿ってみたい。

『三国志』には左慈の伝は立てられていないが、魏書卷二十九・方技伝が注に引く曹丕の『典論』にはその名が見え、次のようにある。

潁川の郗儉は辟穀ができ、伏苓を服用した。甘陵の甘始も行氣を得意とし、年を取っても若々しい容貌であった。廬江の左慈は補導の術に通じていた。皆軍の役人となった。(中略)左慈が来ると、人々は争って補導の術を教わり、宦官の嚴峻までが左慈のもとを訪れて教えを受けた。宦官にはこうした術は全く関係無いのだが、人々が評判になっているものを追うと、こういうことになるのである。⁽²⁾

曹操幕下に集められた方術の士が、いかに時人にもてはやされたかが窺われる一節である。補導の術とは房中術であり、それが左慈の最も得意とする領域であったらしい。

方技伝は続いて曹植の『弁道論』を引いており、そこには曹操が方術の士を宮廷に招いた理由が述べられている。

彼ら（甘始、左慈、卻儉など）を魏国に集めたのは、こうした輩が悪人と通じて人々を欺き、妖術を使って民を惑わすのを恐れたためである。（中略）父君（曹操）、太子（曹丕）及び我々兄弟は皆笑い物にしていて、彼らの術を信じてはいなかった。⁽³⁾

曹操が幕下に方術の士を集めたのは、あくまで民を邪教に染まらせないための施政上の措置であると、曹植は明言している。もつとも『弁道論』はこの後に、卻儉に辟穀をさせたところ百日たっても普段通りであった旨を記しても⁽⁴⁾おり、曹操父子が仙人に心底傾倒しているわけではないが、完全に否定しているわけでもなかったような筆致である。『神仙伝』によると、曹操のもとを辞した左慈は劉表、そして孫策とも接触したことになる。また『抱朴子』巻四にも、

昔、左元放は天柱山で思索し、神人から金丹についての仙経を授かった。漢末の戦乱に遭い、製法に則って金丹を作ることができず、戦乱を避けて江東に渡り、名山に身を投じてこの道の修行をしたいと思った。私の父の従兄弟にあたる葛仙公も元放からこの書を受けた。⁽⁵⁾

と見え、左慈が南に渡ったことを伝えている。左慈の渡南の時期は、『神仙伝』では劉表にまみえていることから建安十三（二〇八）年以前だが、陶弘景の『真誥』注によれば建安末のことであり、約十年の差が生じることになる。⁽⁶⁾

また、『抱朴子』は『典論』や曹植の『釈疑論』を引いて、曹操父子が神仙の实在を信じた証拠として⁽⁷⁾いる。牽強の

嫌いがあるのは否めないが、『列異伝』が曹丕の撰に擬せられていることから、曹氏政権が方術の士に対して柔軟な姿勢であることが、当時の知識人たちの意識に十分浸透していたことは確かであろう。

『博物志』『抱朴子』『神仙伝』に見える左慈はいずれも方術を能くする。しかし、『博物志』の左慈は飢饉の救荒植物など現実を生き抜く術に通じていおり、『抱朴子』の左慈にも隠士的な性格が見える。そうした『博物志』『抱朴子』の左慈像と、専ら妖術で群雄を翻弄する『神仙伝』に見える左慈像との間には、ある程度の断絶が認められる。⁸⁾

こうした履歴を持つ左慈が『演義』に登場するのは、曹操が魏王に爵位を進めて王宮を建て、呉の孫権が温州の蜜柑を献上する際である。⁹⁾『演義』の前身とも言える『三国志平話』にはまだ左慈は登場しないが、『演義』では嘉靖本以下の諸版本間で若干の相違はあるものの、エピソードに大きな違いはない。曹操に謁見した後、左慈が続げざまに曹操を愚弄するあらまは、以下のものである。

左慈は、修行中に天書を得て仙術を体得したと述べ、劉備に位を譲って引退し、自分とともに修行せよと曹操に勧める。怒った曹操に拷問されるが、七日間食物を与えられなくとも苦にもしない。そして、木履を履いてふらりと曹操の宴席に現れると、まずは絵に書いた龍から肝を取り出し、植木鉢に牡丹を咲かせて見せ、松江でしかとれぬはずの鯉を四つ持つ鱸を宮殿の池で釣りあげる。それから金の鉢を袖で覆って、鱸の膾に添える蜀の生薑を居ながらにして手に入れたかと思うと、その生薑を曹操が著した『孟徳新書』に変じて見せた。そして簪で杯の酒を二つに割って曹操と分けあおうとするが、曹操が飲まないと見ると、その杯を空中に投げてしまう。すると杯は白鶴¹¹⁾に変じて宮殿をめぐる飛び、皆がその白鶴を仰ぎ見ているうちに左慈の姿は見えなくなっていた。そうした術を使

う左慈に曹操は殺意を抱くが、左慈は羊に化けて追っ手の目をくらませたかと思えば、分身の術らしきもので数百人の自分を作って攪乱する。捕らえた数百人の左慈を曹操が全て斬首させると、首の穴からそれぞれ青気が立ち上り、それが一所に集まって左慈になった。そして左慈は白鶴を招いてそれにまたがり、「玉鼠、金虎に随いて、奸雄、一旦に休てん」と笑う。そして首の無い左慈のむくろが一斉に曹操に襲いかかり、曹操は昏倒する。

以下、『演義』の左慈について、個々のエピソードの来歴を検討してみたい。

左慈が卻儉らと同様に辟穀をよくしたことは『博物志』などに見え、『神仙伝』には曹操が左慈を召しだして、食物を与えずに一年間石室に閉じこめる話が見える⁽¹³⁾。また卻儉の百日間の断食など、魏晋時代には辟穀の記録には事欠かないが、いずれも『演義』の七日よりはるかに長い日数である。もともと左慈の絶食に一年も付き合っているのは物語の進行に差し障りがあるし、また『弁道論』に「人は食事をしないことが七日にもなれば死んでしまう」とあることなどから、異能とするに足る手頃な相場として、『演義』では七日の絶食に落ち着いたのであろう⁽¹⁴⁾。

曹操に斬首されたときに、数百の左慈の首の穴から立ち上ったという「青気」は、呉の于吉が孫策に殺された場面にも見える⁽¹⁵⁾。「青気」は史書や『搜神記』『神仙伝』などの于吉・左慈の条には見えず、『演義』が添えた趣向である。もともと『博物志』の西王母に関する記述に、「青気が鬱々と雲のように立ちこめていた」と見えるところから、晋代には「青気」という語は、すでに十分仙人を匂わせるようになっていたものと思われる⁽¹⁶⁾。

松江の鱧と蜀の生薑については、『搜神記』に次のような話が見える。

かつて左慈は曹操の宴席に連なっていた。曹操が笑って来賓を顧みて言うには、「今日のこの盛大な宴会には、珍味はおおかたそろっている。足りないのは呉の松江の鱸の膾だけだ」左慈は、「それなら手に入りますぞ。」と言った。そこで左慈は銅盤を求めて水を張り、竹竿に餌をつけて垂らした。しばらくすると一匹の鱸が釣れた。曹操は大いに手を打ち、列席していたものは皆驚いた。曹操が言った。「一匹では列席している皆に行き渡らぬ。二匹あればよいのだが。」左慈は再び針に餌をつけて糸を垂れた。しばらくするとまた鱸を釣り上げた。どれも体長三尺余りで、いきいきとしてすばらしいものであった。曹操はその鱸を目の前で膾にさせ、列席者に行き渡らせた。曹操が言うには、「魚は手に入ったが、蜀の生薑が無いのが残念だ。」左慈が言った。「それもまた手に入りますぞ。」曹操は近くから生薑を買って来るのではないかと思ひ、「わしは以前、錦を買うために蜀に使者を遣わしたが、人をやつて、その使者に錦を二反余計に買うように伝えさせてくれ。」と言った。しばらくすると、左慈が出した使いは生薑を持って帰つて来た。そして言うには、「店で曹操様の遣わされた使者と会い、二反余計に買うように申しました。」一年余りが過ぎて、曹操の使者が帰つてくると、果たして二反余計に買うようにとのことでしたので、その使者は、「某月某日、店で人と会つたところ、曹操様の命令で二反余計に買うようにとのことでしたので。」と言つた。⁽¹⁷⁾

『演義』では、宴席で膾をすすめられた左慈の方から「膾は松江の鱸がうまい」と曹操に言っており、銅盤ではなく宮殿の池から松江の鱸を釣り、また蜀の生薑も金の鉢から得ている。そうした相違はあるが、『演義』が『搜神記』『後漢書』のエピソードを下敷きしていることは間違いない。

羊に化けて曹操の追っ手から逃れる話や、市場で左慈を捕らえると市場の人々が皆左慈になってしまったという『演義』のエピソードも、その典拠とおぼしき逸話が『搜神記』に見られる。しかし『後漢書』左慈伝も概ね『搜神記』の記述を踏襲しており、これらのエピソードは『後漢書』にも見えるため、『演義』が『搜神記』と『後漢書』のどちらに拠ったかは確定できない。

『演義』では、蜀の生薑を『孟徳新書』に変えるという、曹操の神経を逆撫でする余興を挟んで宴が続く。そして左慈が杯の酒を二分し、それを飲み干して擲つと白鶴になるのだが、その話は『搜神記』『後漢書』には見えず、『神仙伝』に記されている。『神仙伝』には、曹操が殺意を抱いていることに気付き、左慈が暇乞いすると、曹操は敢えて引き留めようとはせず左慈のために宴席を設けたとある。そしてその席上でのこと、

左慈が言うには「今から遠くに離れることになりしますので、杯を分けて酒を飲みとございます」曹操は「よからう。」と言った。このときは寒い日で、温めた酒がまだ熱いうちに、左慈は道士の冠の簪を抜き、それで酒をかき混ぜた。しばらくすると簪は無くなってしまったが、それは墨を磨ったかのようにであった。最初、曹操は左慈が杯を分けたいと言うのは、曹操が先に飲んでそれから左慈に杯を与えるものと思っていた。しかるに左慈が簪で杯の酒を断つと、そこには数寸の間隔ができ、左慈はその半分を飲むと、残りの半分を曹操に与えた。曹操は喜ばず、すぐには飲まずにいと、左慈は自分が飲み干したいと乞い、飲み終わると杯を楯に投げつけた。杯は空中に懸かってゆらゆらと動き、飛ぶ鳥が俯いたり仰いだりするようであり、落ちそうだが落ちてこなかった。列席していた者でその杯を見ていないものはなく、杯はしばらくすると落ちてきたが、その時にはすでに左慈の姿は消え去って

『神仙伝』そのものに拠ったかどうかは定かではないが、『演義』が『神仙伝』を淵源とするこのエピソードを取り込んでいることは明白である。『搜神記』の記述が『演義』に取り込まれた場合は、史書である『後漢書』を参照した可能性も拭えないが、左慈擲杯のエピソードは『搜神記』『後漢書』には見えない。『演義』が、正史に取り込まれない異聞をも視野におさめていたことを示す好例であると言えるだろう。

また『演義』は左慈の姿を「片目は眇、片足は跛、白藤の冠をかぶり、青懶の衣を纏い、木履を履いている」と描写しているが、左慈のこのスタイルは、『搜神記』『後漢書』には記されていない。『神仙伝』には、市場の人が皆左慈と同様のなりになってしまふ場面に「片目が眇で、青い葛巾を着け、青いひとえの衣を纏っている」という描写があり、⁽¹⁹⁾「青い葛巾」が「白藤の冠」に改められてはいるが、『演義』が『神仙伝』の描写に拠ったであろうことが推測される。

また『神仙伝』には、孫策に追われる左慈が「木履を履き、一本の竹の杖をついて、ゆっくり歩いている」場面がある。⁽²¹⁾『演義』では左慈のトレードマークともなった「木履」もここに典拠が求められる。そして『演義』に見える「片足が跛」というのも、『神仙伝』で「一本の竹の杖」をついている所からの連想であろう。

「木履竹杖」の取り合わせは、唐の『北堂書鈔』や『仙苑編珠』にもすでに見えており、⁽²²⁾左慈のイメージとして定着していたようである。従って『演義』が直接『神仙伝』に拠ったと即断することはできないが、少なくとも『演義』の左慈の容貌が『神仙伝』系統の描写に基づいていることは間違いない。

ところで『神仙伝』の左慈擲杯の場面には、棟に投げつけた杯が「飛ぶ鳥が俯いたり仰いだりするようであり、落ち

そうだが落ちてこなかった」とある。これが『演義』になると、杯が「白鶴」に変じて宮殿をめぐる飛んだ、とされている。また『演義』では、左慈が物語から退場する場面でも「白鶴」を招いている。左慈と「白鶴」の関係について、節を改めて検討してみたい。

二

『神仙伝』に端を発する左慈擲杯の逸話は、以後の諸本も広く引くところである。『雲笈七籤』『三洞羣仙録』『太平御覧』『太平広記』『歴世真仙体道通鑑』など歴代の書物に見えるが、いずれも左慈が投げた杯はゆらゆらと「鳥」が飛ぶようであった、という記述にとどまっている。『演義』の記すが如き、杯が「白鶴」に変じて宮殿をめぐる飛んだとする記述は、管見の限りでは見あたらない。⁽²⁴⁾ また『演義』から退場する場面で描かれているような、「白鶴」に乗る左慈の逸話も見あたらない。

白鶴に乗った仙人と言えば、まず緱氏山の山頂に姿を見せた王子喬が思い浮かぶ。また巧みな簫の音で白鶴を庭に呼んだ籛史や、蘇仙公の母の箱から二羽の白鶴が飛び立ったなど、白鶴は仙人の近辺にしばしば現れるが、これらの仙人の逸話には、左慈との直接の接点は見いだせない。⁽²⁵⁾

ところで、呉の孫権に招かれて優遇された方術の士に、介象がいる。『仙苑編珠』巻上では左慈と並んで採録されている人物であるが、『神仙伝』巻九に立てられている介象の伝には、左慈と酷似するエピソードが見える。

膾にするにはどの魚が最も美味いか、孫権と論じた。介象が言った。「膾にするには鱈が最上でございます。」孫権

が言うには、「この近辺で獲れる魚について言っておるのだ。鰯は海で獲れるのであって、どうして手に入れられようか。」介象は「手に入りますぞ。」と言うと、宮殿の庭に穴を作らせて水を汲んで満たし、釣針を求めた。介象は立ち上がると針に餌をつけ、糸を水の入った穴に垂らした。しばらくすると、果たして鰯が釣れた。呉主は驚喜して、食べられるのかと介象に尋ねた。介象が言った。「わざわざ陛下のために膾にするよう釣ったのです。どうして食べられないものを釣ったりいたしましょう。」そこで釣った鰯を調理場で切らせた。孫権が言うには、「蜀からの使者が来たときに、蜀の生薑はあえものにするの大層美味いと聞いたが、こんなときにそれが無いのが残念じや。」介象は言った。「蜀の生薑など、簡単に手に入りますぞ。願わくば、使いの者に代金を渡してお差し遣わしく下さい。」呉主は近習の一人を指名して五十銭を渡した。介象は一枚の符を書いて、青竹の杖の中に納めた。そして使者に目を閉じて杖に跨らせ、杖が止まったら生薑を買い、それが済んだらまた目を閉じるように言った。使いの者が言われた通りに杖に跨ると、しばらくして杖が止まり、もう成都に着いていたが、使いの者にはどこだか分からなかった。人に尋ねてそこが蜀の市場だと知ると、生薑を買った。ちようどこのとき、呉からの使者として張温が蜀に来ており、市場で出会うと非常に驚いた。張温はすぐさま手紙をしたため、家に届けてくれるようことづけた。使いの者は生薑を買い終わると、張温の手紙を持ち、生薑を背負い、杖に跨って目を閉じた。しばらくすると呉に帰っていたが、調理場ではちようど膾を刻み終わつたところだつた。⁽²⁶⁾

いささか引用が長くなったが、この介象のエピソードが、左慈が鱸と生薑を得る『搜神記』『後漢書』の話と同工異曲であることは一目瞭然である。『後漢書』では左慈自ら蜀に赴いている点が異なるが、すでに蜀に行っている別の使

者と会い、それを実際に蜀まで行った証拠とする点などは一致している。

この『神仙伝』の介象のエピソードは、『三国志』呉書卷十八の注にもそのままの形で記されている。『三国志』の注では介象の話はここで終わっているが、『神仙伝』には続きがある。介象の死に際して孫権が見事な梨を下賜したことが見え、そして尸解を遂げた後に、次のような記述を添えている。

孫権は介象のことを思い廟を建ててやり、時には自ら赴き、介象を祭った。そうしたときには常に白い鶴が座上に飛んで来て、ゆっくりと旋回して飛んでは、また去って行った。⁽²⁷⁾

『太平御覧』『太平広記』も『神仙伝』のこの場面を引いており、尸解を遂げた介象と「白鶴」との関係は知られていたことであろう。

こうして見ると、介象の影響を蒙って、『演義』の左慈に「白鶴」が現れることになったのであろうことが推測される。宴席で魚を釣って見せ、蜀の生薑を居ながらにして手に入れる、というエピソードを共有しているために、もとは介象のものであった「白鶴」まで、『演義』の左慈に引き寄せられたのであろう。そして左慈の擲った杯が「鳥」の舞うようであったという逸話も、介象の「白鶴」をより左慈に近いものとした大きな理由であろう。

左慈に介象の逸話を取り込んだのが、『演義』が得意とする故意の転用であるか、それとも類似の逸話であるが故の混乱であるかは分からないが、以下にもう一つ、二人の伝記が混用されている箇所を示す。

『演義』では、左慈は魏王宮の宮殿の池から松江の鱸を釣り上げている。『演義』の諸版本もそろって「堂下大池」

「堂下忽有一池水」としており、大きな異同は見られない。

しかし、先に見たように『捜神記』『後漢書』では、左慈は「銅盤」を求めて水を張り、そこから鱸を釣ったことになっている。後の『初学記』や『太平御覧』も『捜神記』を引いているが、それでも「銅盤」から釣ることに変わりはない。また『歴世真仙体道通鑑』は単純に『捜神記』の逸話を引いているというわけではないのだが、鱸を釣ったのが「銅盤」である点に関しては一致している。⁽²⁹⁾

一方の介象はというと、孫権の宮殿の庭に穴を作らせて水を注ぎ、その人口池から鱈を釣り上げている。先に挙げた『神仙伝』をはじめとして、『仙苑編珠』『藝文類聚』『太平御覧』『歴世真仙体道通鑑』などに採られているが、いずれも宮殿の庭の穴から釣り上げているという点は共通している。

こうして見ると従来は、左慈は「銅盤」、介象は「宮殿の庭の池」と区別されていたのを、『演義』が混同していることが分かる。「白鶴」が左慈の神仙のイメージの後押しをするのに比べて、「銅盤」をわざわざ「庭の池」にすることでいかほどの効果が得られるのかは疑問である。改変のもたらす効果に疑問がもたれる点からも、それが故意の転用ではなくて混乱である可能性もあるが、いずれにせよ、左慈が介象の影を背負って『演義』に登場していることが確認できよう。

四

『演義』の左慈は、『捜神記』『後漢書』系統と『神仙伝』系統の双方の流れを汲んで形成されており、また介象の逸話とも部分的に交錯している。『演義』が直接『神仙伝』などの神怪を記す書を参照した確証はない。しかし、介象の

事績との細部での混同などから、『神仙伝』あるいはその逸話を継承する書を参照していた可能性が大きいであろう。左慈を描くにあたって、『演義』が史書以外の文献も参照していたであろうことは、非常に興味深い。神仙についても何らかの書を参照していたというのは、史実同様に典拠のある事柄を記そうとした姿勢であると言えるだろう。そしてそれは、あくまで史実に寄り添いながら、出来る限りの虚構を施すという『演義』の創作のあり方を示している。

『演義』には、左慈以外にも曹操を取り巻く方術の士が何人も登場する。華佗、管輅らはいずれも正史に伝を持つが、『演義』の彼らの活躍が、史実と大きく異なる場合も間々ある。『演義』では曹操の死の直前に華佗が診断するが、実際にはそれより十年以上前に華佗は没している。また管輅に至っては活躍の時代が下り、曹操と関わった形跡すらない。そうした方術の士を曹操の近辺にふんだんに描きこむ『演義』の手際は、相当に念が入ったものであると言えるだろう。⁽³²⁾ また于吉が孫策を呪い殺す場面でも、立て続けに十数回も幻影が現れるなど、『演義』は執拗なまでの描写を施している。方術の士たちが、合理主義に徹した英雄たちを何よりの好餌としたところに、迷信を必ずしも弊害としない民衆の怨嗟と嘲弄が垣間見えるようである。

注

- (1) 左慈に関する主な事績は、『後漢書』卷八十二下・方術列伝、『搜神記』卷一、『神仙伝』卷五に見える。尚、本稿の引用は、『搜神記』は『学津討原』に、『神仙伝』は『増訂漢魏叢書』に拠った。また『三国志演義』に関しては、嘉靖本、葉逢春本、周曰校本、劉龍田本、朱鼎臣本、余象斗本、鄭少垣本、湯賓尹本、毛宗崗本を参照した。
- (2) 潁川郤儉能辟穀 餌伏苓。甘陵甘始亦善行氣、老有少容。廬江左慈知補導之術。並爲軍吏。(中略)左慈到、又競受其補導之術、至寺人嚴峻、往從問受。闍豎真無事於斯術也、人之逐聲、乃至於是。(『三国志』魏書卷二十九・方技伝引)

【典論】

- (3) 卒所以集之於魏國者、誠恐斯人之徒、接姦先以欺衆、行妖慝以惑民。(中略) 自家王與太子及余兄弟咸以爲調笑、不信之矣。〔三國志〕魏書卷二十九・方技伝引『弁道論』
- (4) 余嘗試卻儉絶穀百日、躬與之寢處、行步起居自若也。〔三國志〕魏書卷二十九・方技伝引『弁道論』
- (5) 昔左元放於天柱山中精思、而神人授之金丹仙經。會漢末亂、不遑合作、而避地來渡江東、志欲投名山以修斯道。余從祖仙公、又從元放受之。〔抱朴子〕卷四
- (6) 前田繁樹氏「曹操幕下の仙者たち(上)——左慈を中心として——」〔中國古典研究〕第三十七號、一九九三。
- (7) 『抱朴子』内篇卷一。
- (8) 小南一郎氏「『神仙伝』——新しい神仙思想」〔中国の神話と物語〕岩波書店、一九八四。『抱朴子』と『神仙伝』に見える左慈像の断絶から、現行の『神仙伝』の基礎が直接葛洪の手になつたものではなく、少し時代がくだり民衆の伝承を受けて成立したものであらうと論じている。
- (9) 嘉靖本卷十四、第六則「魏王宮左慈擲盃」、毛宗崗本第六十八回「左慈擲杯戲曹操」。
- (10) 左慈が得た天書の名は、嘉靖本、周曰校本、劉龍田本、朱鼎臣本、毛宗崗本では「遁甲天書」とされているが、葉逢春本は「地甲天書」、余象斗本、鄭少垣本、湯賓尹本は「六甲天書」に作る。また、左慈が天書を得る場面で、葉逢春本、余象斗本、鄭少垣本、湯賓尹本には「百餘白鶴」の語が見える。葉逢春本の影響を受けた「花関索」系の諸版本が「六甲天書」に作り、「百餘白鶴」と記しているのである。また、天書は「天遁」「地遁」「人遁」の三巻からなり、嘉靖本、周曰校本、毛宗崗本はそれぞれの内容を説明している。しかし、葉逢春本、劉龍田本、朱鼎臣本、余象斗本、鄭少垣本、湯賓尹本はいずれも「天遁」「地遁」の内容を削除し、本来「人遁」の内容であつたもののみを記し、それが天書三巻の内容であるかのように簡略化して記している。尚、「演義」の版本系統に関しては、中川論氏『三國志演義』版本の研究(汲古書院・一九九八)に詳しい。
- (11) 嘉靖本、葉逢春本、劉龍田本、朱鼎臣本は「白鶴」とするが、周曰校本、余象斗本、鄭少垣本、湯賓尹本、毛宗崗本は「白鳩」に作る。
- (12) 魏王所集方士名、上黨王真、隴西封君達、甘陵甘始、魯女生、譙國華佗字元化、東郭延年、唐雱、冷壽光、河南卜式、

張貂、薊子訓、汝南費長房、鮮奴辜、魏國軍吏河南趙聖卿、陽城郤儉字孟節、廬江左慈字元放、右十六人魏文帝、東阿王、仲長統所說、皆能斷穀不食、分形隱沒、出入不由門戶。左慈變形、幻人視聽、厭刻鬼魅、皆此類也。〔博物志〕卷五)

(13) 魏曹公聞而召之閉一石室中、使人守視斷穀期年、乃出之、顔色如故。〔神仙伝〕卷五)

(14) 夫人不食七日則死。〔三國志〕魏書卷二十九・方技伝引〔弁道論〕

(15) 嘉靖本卷六、第七則「孫策怒斬于神仙」、毛宗崗本第二十九回「小霸王怒斬于吉」。

(16) 七月七日夜漏七刻、王母乘紫雲車而至於殿西、南面東向、頭上戴七種、青氣鬱々如雲。〔博物志〕卷八)

(17) 嘗在曹公座、公笑顧衆賓曰、今日高會、珍羞畧備、所少者吳松江鱸魚爲膾。放云此易得耳。因求銅盤貯水、以竹竿餌、釣于盤中。須臾引一鱸魚出。公大拊掌、會者皆驚。公曰、一魚不周坐客、得兩爲佳。放乃復餌釣之、須臾引出、皆三尺餘生鮮可愛。公便自前膾之、周賜座席。公曰、今既得鱸恨無蜀中生薑耳。放曰、亦可得也。公恐其近道買、因曰、吾昔

使人至蜀買錦、可教人告吾使使增市二端。人去須臾還得生薑、又云、於錦肆下見公使已勅增市二端。後經歲餘公使還、果增二端。問之、云、昔某月某日見人於肆下以公勅勅之。〔搜神記〕卷一)

(18) 曰、今當遠曠、乞分杯飲酒。公曰善。是時天寒、溫酒尚熱。慈拔道簪以撓酒、須臾道簪都盡、如人磨墨。初公聞慈求分杯飲酒、謂當使公先飲以與慈耳。而拔道簪以畫杯酒中斷、其間相去數寸。即飲半、半與公、公不善之、未即爲飲、慈乞盡自飲之。飲畢以杯擲屋棟、杯懸搖動、似飛鳥俯仰之狀、若欲落而不落、舉坐莫不視杯。良久乃墜。既而已失慈矣。〔神仙伝〕卷五)

(19) 嘉靖本は「眇一目、跛一足、白籐冠、青懶衣、穿木履先生」と記す。左慈の風貌については、版本間で大きな異同はない。

(20) 眇一目、着青葛巾、青單衣。〔神仙伝〕卷五)

(21) 慈在馬前、着木履、挂一竹杖、徐徐而行。〔神仙伝〕卷五)

(22) 『北堂書鈔』卷百二十三、卷百三十六、『仙苑編珠』上卷。

(23) 『雲笈七籤』卷八十五、『三洞羣仙錄』卷二十、『太平御覽』卷百八十七、卷七百五十九、『太平広記』卷十一、『歴世真仙体道通鑑』卷十五。

- (24) 陳翔華氏「三国故事劇考略」(「三国演義叢考」北京大學出版社、一九九五)は、宝文堂書目に見える、「志登仙左慈飛杯」と題された無名氏の戯曲を紹介しているが、すでに散佚しており、擲った杯が鶴に化したかどうかは不明であると
する。
- (25) 王子喬、籙史は「列仙伝」巻上、蘇仙公は「神仙伝」巻九に見える。
- (26) 呉主與論膾魚何者最美、象曰、鰻魚膾爲上。呉主曰、論近道魚耳、此出海中、安可得邪。象曰、可得。乃令人殿庭中作方坎、汲水滿之、並求鈎。象起餌之、垂綸於坎、須臾果得鰻魚。呉主驚喜、問象可食不。象曰、故爲陛下取作生膾、安敢取不可食之物。乃使厨下切之。呉主曰、聞蜀使來、得蜀薑作葷甚好、恨爾時無此。象曰、蜀薑豈不易得、願差所使者可付直。呉主指左右一人以錢五十付之。象書一符以著青竹杖中、使行人閉目騎杖、杖止便買薑、訖復閉目。此人承言騎杖須臾止、已至成都不知是何處。問人知是蜀市、乃買薑。于時呉使張温先生在蜀、既於市中相識甚驚、便作書寄其家。此人買薑畢、捉書負薑、騎杖閉目、須臾已還呉、厨下切膾適了。(「神仙伝」巻九)
- (27) 帝思之與立廟、時時躬往祭之、常有白鶴來集座上、遲迴復去。(「神仙伝」巻九)
- (28) 「太平御覽」卷九百十六、「太平広記」卷十三。「歷世真仙体道通鑑」卷十五では「白鶴」を「白鶴」に作る。
- (29) 「初学記」卷二十二、「太平御覽」卷八百六十二、「歷世真仙体道通鑑」卷十五。
- (30) 「仙苑編珠」巻上、「藝文類聚」卷九十六、「太平御覽」卷九百三十七、卷九百七十七、「歷世真仙体道通鑑」卷十五。宴席での釣りと蜀の生薑に関して、「藝文類聚」は介象の話のみを載せ、左慈の話は記していない。また「太平広記」の巻十一「左慈」と巻十三「介象」は、どちらもこの話に触れていない。混乱を避けるためになされた取捨であろうか。
- (32) 「三国志」魏書卷二十九・方技伝の華佗伝に、愛息曹冲が病に罹った際、華佗を殺してしまったことを曹操が悔やんだ旨が見える。曹冲は建安十三年(二〇八年)年に没しているから、華佗の死はそれ以前となる。史実では、華佗を殺さぬよう荀彧が諫めているが、「演義」では華佗の死が荀彧の没後のことになってしまい、そこで賈詡に諫言させるよう改変している。